

博士論文（要約）

論文題目 近世後期朝廷の復興理念と朝幕関係

氏 名 金 炯辰

目次

凡例	1
序章 近世朝廷・朝幕関係の研究史と課題	3
一．従来の研究視角と問題の提起	3
二．本研究の方向性と各章の構成	39
第一部 近世後期の朝廷運営と復興理念	
第一章 仁孝天皇の御会読・御講釈と朝廷運営	61
第二章 律令封禄の再興構想と関白鷹司政通	93
第三章 天保の天皇号・漢風諡号再興と古義堂伊藤家	145
第二部 朝幕関係の変容と武家社会の朝廷観	
第四章 徳川家斉の太政大臣昇進と昇進御礼使の朝廷派遣	191
第五章 朝廷構成員への支援拡充要望と朝廷復古の問題	245
第六章 論争「屋松問答」と松岡行義の朝廷観	313
終章 一九世紀前半における朝廷と朝幕関係の変容	377
一．本論のまとめ	377
二．課題と展望	395
参考文献目録	417

本文

5 年以内に出版予定

参考文献一覧

【図書・論文】

- 青木美智男「幕藩制国家論をめざして―「維新変革の再検討」の新たな前進のために」(『歴史学研究』三六〇、一九七〇年)。
- 朝尾直弘「将軍と天皇」(『戦国時代』吉川弘文館、一九七八年)。
- 朝尾直弘「幕藩制と天皇」(『朝尾直弘著作集 三 将軍権力の創出』岩波書店、二〇〇四年、初出は一九七五年)。
- 荒木裕行「京都町奉行所における朝廷風聞調査について」(『近世の摂家・武家伝奏日記の蒐集・統合化による史料学的研究』科研報告書 平成二二・二五年度、二〇一四年)。
- 荒木裕行『近世中後期の藩と幕府』(東京大学出版会、二〇一七年)。
- 飯倉洋一「本居宣長と妙法院宮」(『江戸文学』一二、一九九四年)。
- 飯倉洋一「妙法院宮サロン」(高田衛編『秋成とその時代(論集近世文学 五)』勉誠社、一九九四年)。
- 飯倉洋一・盛田帝子編『文化史の中の光格天皇』(勉誠出版、二〇一八年)。
- 家近良樹『幕末の朝廷―若き孝明帝と鷹司関白』(中央公論新社、二〇〇七年)。
- 五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明『朝廷権威の復興と京都画壇(天皇の美術史 五 江戸時代後期)』(吉川弘文館、二〇一七年)。
- 井ヶ田良治「江戸時代における公家領の支配構造」(『同志社法学』三〇・一、一九七八年)。
- 石井良助『天皇一天皇の生成および不親政の伝統』(講談社学術文庫、二〇一一年、初版は一九八二年、改訂以前の初版は『天皇一天皇統治の史的解明』弘文堂、一九五二年)。
- 石田一良『伊藤仁斎』(吉川弘文館、一九八九年)。
- 石田俊「近世中期の朝廷運営と外戚」(『近世の天皇・朝廷研究』三、二〇一〇年)。
- 石田俊「近世朝廷における意思決定の構造と展開―「表」と「奥」の関係を中心に」(『日本史研究』六一八、二〇一四年)。
- 石村貞吉『有職故実研究』(学術文献普及会、一九五五年)。
- 維新史料編纂事務局編『維新史』一・二(明治書院、一九三九～一九四〇年)。
- 磯前順一・小倉慈司「正親町家と垂加神道」(磯前・小倉編『近世朝廷と垂加神道』ペリかん社、二〇〇五年)。
- 一戸渉「復古というモード―和学から国学へ」(『十九世紀の文学(近世文学史研究 三)』ペリかん社、二〇一九年)。
- 伊藤武雄『玉松操』(金鶏学院、一九二七年)。
- 伊東多三郎「(歴史手帖) 権力と茶坊主」(『日本歴史』三〇一、一九七三年)。
- 井上勝生「幕末政治史のなかの天皇―安政期の天皇・朝廷の浮上について」(井上『幕末維新政治史の研究』埴書房、一九九四年、初出は石上英一ほか編『講座・前近代の天皇 二 天皇権力の構造と展開 その二』青木書店、一九九三年)。
- 井上智勝・高埜利彦編『国家権力と宗教(近世の宗教と社会 二)』(吉川弘文館、二〇〇八年)。
- 井上容子「衣紋会の組織と活動について」(久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版

社、一九九五年)。

印東千鉄(森銑三)「山県大弐の孫竹尾善筑」(『伝記』二・一一、一九三五年)。

内野吾郎「江戸派の性格と位置—歌論を中心に」(内野『江戸派国学論考』創林社、一九七九年)。

梅田康夫「地下官人考」(大竹秀男・服藤弘司編『幕藩国家の法と支配』有斐閣、一九八四年)。

大口勇次郎「文化・文政時代」(井上光貞・永原慶二・児玉幸多・大久保利謙編『日本歴史大系 三 近世』山川出版社、一九八八年)。

大口勇次郎「国家意識と天皇」(『岩波講座日本通史一五(近世五)』岩波書店、一九九五年)。

大久保利謙「幕末政治と政權委任問題—大政奉還の研究序説」(『明治維新の政治過程(大久保利謙歴史著作集一)』吉川弘文館、一九八六年)。

大久保利謙「幕末京都の学習院」(大久保『明治維新と教育(大久保利謙歴史著作集 四)』吉川弘文館、一九八七年)。

大久保利謙「幕末国学と王政復古教学史」(大久保『明治維新と教育(大久保利謙歴史著作集四)』吉川弘文館、一九八七年)。

大塚祐子編『屋代弘賢略年譜』(私家版、二〇〇二年)。

大沼宣規「江戸時代後期における考証家の一側面—「後松日記」をてがかりとして」(『史境』三八・三九号、一九九九年)。

大沼宣規「寛政改革と文人」(熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』吉川弘文館、二〇〇三年)。

大日方克己「〔歴史手帖〕雲州本延喜式と藍川慎・屋代弘賢・塙保己一」(『日本歴史』七六二、二〇一一年)。

大屋敷佳子「幕藩制国家における武家伝奏の機能」一・二(『論集きんせい』七・八、一九八二・一九八三年)。

岡中正行「鈴門の階層」(岡中・鈴木淳・中村一基編『本居宣長と鈴屋社中—『授業門人姓名録』の総合的研究』錦正社、一九八四年)。

小川恭一「「柳営学」の人々」(『日本古書通信』八一六・八一八、一九九七年)。

奥野高廣『皇室御経済史の研究 後篇』(国書刊行会、一九四四年)。

小倉真紀子「近世禁裏における六国史の書写とその伝来」(田島公編『禁裏・公家文庫研究 第三輯』思文閣出版、二〇〇九年)。

小沢朝江「「復古」という流行—寛政期の公家邸宅造営と復古内裏の影響」(西和夫編『建築史の回り舞台—時代とデザインを語る』彰国社、一九九九年)。

落合延孝「歴史教科書における天皇の叙述」(『歴史評論』三一四、一九七六年)。

小野将「近世後期の林家と朝幕関係」(『史学雑誌』一〇二・六、一九九三年)。

小野将「国学者」(横田冬彦編『芸能・文化の世界(近世の身分的周縁 二)』吉川弘文館、二〇〇〇年)。

小野将「国学の都市性」(鈴木博之ほか編『都市文化の成熟(シリーズ都市・建築・歴史 六)』東京大学出版会、二〇〇六年)。

小野信二「幕府と天皇」(『岩波講座日本歴史一〇 近世二』(岩波書店、一九六三年)。

小野信二「近世初期における朝幕関係—社会経済的一考察」(『拓殖大学論集』三九、一九六四年)。

表智之「一九世紀日本における「歴史」の発見—屋代弘賢と〈考証家〉たち」(『待兼山論叢 日

本学篇』三一、一九九七年)。
 鍛冶宏介「江戸時代教養文化のなかの天皇・公家像」(『日本史研究』五七一、二〇一〇年)。
 加藤仁平「伊藤仁斎の堀川塾」(『教育学研究』八・五、一九三九年)。
 加藤仁平『伊藤仁斎の学問と教育—古義堂即ち堀川塾の教育史的研究』(第一書房、一九七九年、初版は一九四〇年)。
 加藤悠希「有職故実家松岡行義の邸宅に関する知識について」(加藤『近世・近代の歴史意識と建築』中央公論美術出版、二〇一五年)。
 神崎彰利「近世における公家領の構造—久世家領を中心に」(『明治大学刑事博物館年報』一二、一九八一年)。
 衣笠安喜「幕藩制下の天皇と幕府」(『天皇制と民衆』東京大学出版会、一九七六年)。
 久保貴子『近世の朝廷運営—朝幕関係の展開』(岩田書院、一九九八年)。
 熊倉功夫『寛永文化の研究』(吉川弘文館、一九八八年、後に『熊倉功夫著作集 第五卷 寛永文化の研究』思文閣出版、二〇一七年)。
 熊倉功夫『後水尾天皇』(中公文庫、二〇一〇年)。
 黒住真「儒学と近世日本社会」(黒住『近世日本社会と儒教』ペリカン社、二〇〇三年、初出は一九九四年)。
 小関悠一郎「松平定信明君像と「安民」＝勤王論の系譜」(浪川健治編『明君の時代』清文堂出版、二〇一九年)。
 斎藤政雄『『和学講談所御用留』の研究』(国書刊行会、一九九八年)。
 斎藤希史『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫、二〇一四年、初版は二〇〇七年)。
 榊原頼輔『足代弘訓』(山村浅次郎刊、一九二三年)。
 坂田聡・吉岡拓「近世の民衆と天皇・朝廷」(坂田・吉岡『民衆と天皇』高志書院、二〇一四年)。
 佐々木恵介『天皇と摂政・関白(天皇の歴史三)』(講談社、二〇一一年)。
 佐々木潤之介「幕藩制と天皇」について」(『遡行』三、一九七五年)。
 佐々木克『幕末の天皇・明治の天皇』(講談社、二〇〇五年)。
 佐竹朋子「学習院学問所設立の歴史的意義」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要：史学編』二、二〇〇三年)。
 佐竹朋子「三条実万の思想形成について」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要：史学編』四、二〇〇五年)。
 佐竹朋子「学習院学問所が果たした役割」(『近世の天皇・朝廷研究』二、二〇〇九年)。
 佐竹朋子「一八世紀公家社会における学問と家業—滋野井家を事例として」(『ヒストリア』二三五、二〇一二年)。
 佐竹朋子「江戸時代の公家と蔵書」(横田冬彦編『読書と読者(シリーズ本の文化史 一)』平凡社、二〇一五年)。
 佐竹朋子「野宮家における家業の継承—野宮定之を事例として」(『史窓』七五、二〇一八年)。
 佐多芳彦「有職故実の学史と再生」(佐多『服制と儀式の有職故実』吉川弘文館、二〇〇八年)。
 佐藤雄介『近世の朝廷財政と江戸幕府』(東京大学出版会、二〇一六年)。
 佐藤雄介「嘉永期の朝幕関係」(藤田覚編『幕藩制国家の政治構造』吉川弘文館、二〇一六年)。

佐藤雄介「近世中後期の武家伝奏の活動と幕府役人観」(神田裕理編・日本史史料研究会監修『伝奏と呼ばれた人々—公武交渉人の七百年史』ミネルヴァ書房、二〇一七年所収)。

佐藤雄介「近世後期・幕末の鷹司家貸付所名目金と心観院」(朝幕研究会編『論集近世の天皇と朝廷』岩田書院、二〇一九年)。

佐藤雄介「近世後期の公家社会と金融」(『日本史研究』六七九、二〇一九年)。

島田英明『歴史と永遠—江戸後期の思想水脈』(岩波書店、二〇一八年)。

清水光明「朝廷・公家社会と朱子学—天明の京都大火後の動向を中心に」(『近世の天皇・朝廷研究』四、二〇一二年)。

清水光明『近世日本の政治改革と知識人—中井竹山と草茅危言』(東京大学出版会、二〇二〇年)。

仙波ひとみ「幕末政局のなかの天皇・朝廷」(『講座明治維新二 幕末政治と社会変動』有志舎、二〇一一年)。

高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』(東京大学出版会、一九八九年)。

高埜利彦「江戸幕府の朝廷支配」(高埜『近世の朝廷と宗教』吉川弘文館、二〇一四年、初出は一九八九年)。

高埜利彦「禁中並公家諸法度」についての一考察—公家の家格をめぐって」(高埜『近世の朝廷と宗教』吉川弘文館、二〇一四年、初出は一九八九年)。

高埜利彦「後期幕藩制と天皇」(高埜『近世の朝廷と宗教』吉川弘文館、二〇一四年、初出は一九九三年)。

高埜利彦編『朝廷をとりまく人びと(身分的周縁と近世社会 八)』(吉川弘文館、二〇〇七年)。

高橋博『近世の朝廷と女官制度』(吉川弘文館、二〇〇九年)。

田島公「延喜・天暦の「聖代」観」(『岩波講座日本通史 五(古代 四)』岩波書店、一九九五年)。

田中俊吾(須佐俊吾)「日本近世思想史研究の問題点と伊勢貞丈」(『中央大学大学院論究 文学研究科篇』三〇、一九九八年)。

田中俊吾(須佐俊吾)「実践倫理、生活世界の学としての有職故実—「故実家」伊勢貞丈の思想」(『倫理学年報』五一、二〇〇二年)。

田中暁龍「尊号一件風説書の成立事情」(『近世史研究』四、一九九〇年)。

田中暁龍『近世前期朝幕関係の研究』(吉川弘文館、二〇一一年)。

田中暁龍『近世朝廷の法制と秩序』(山川出版社、二〇一二年)。

田中暁龍「近世の天皇朝廷研究の到達点と課題」(『歴史評論』七七一、二〇一四年)。

千葉拓真「近世大名家における書札礼と公武の序列—加賀前田家を中心に」(『史学雑誌』一二一-八、二〇一二年)。

朝幕研究会編『論集 近世の天皇と朝廷』(岩田書院、二〇一九年)。

辻善之助「江戸時代朝幕関係」(辻『日本文化史五 江戸時代一』春秋社、一九五〇年)。

辻達也編『天皇と将軍(日本の近世二)』(中央公論社、一九九一年)。

辻本雅史「寺子屋から国民教育へ」(『岩波講座日本の思想 二』岩波書店、二〇一三年)。

辻本雅史編『教育社会史』(山川出版社、二〇〇六年)。

帝国学士院編『皇室制度史 六』(帝国学士院、一九四五年)。

遠山茂樹『明治維新と天皇』(岩波書店、一九九一年)。

徳富猪一郎『近世日本国民史 二二 宝暦明和篇』（民友社、一九二六年）。

徳富猪一郎『近世日本国民史 二四 松平定信時代』（民友社、一九二七年）。

徳富猪一郎『近世日本国民史 二五 幕府分解接近時代』（民友社、一九二七年）。

富永牧太「古義堂顛末の記」（天理図書館編『古義堂文庫目録』天理大学出版部、一九五六年）。

中川和明「幕府の弾圧と篤胤の江戸退去」（中川『平田国学の史的研究』名著刊行会、二〇一二年、初出は二〇〇四年）。

中川学「鳴物停止令と朝廷一停止令をめぐる朝幕関係」（中川『近世の死と政治文化一鳴物停止と穢』吉川弘文館、二〇〇九年、初出は一九九五年）。

長坂良宏『近世の摂家と朝幕関係』（吉川弘文館、二〇一八年）。

中澤伸弘「徳川時代中期の衣紋道高倉家の門人の一考察—『御門弟名籍』をめぐって」（『明治聖徳記念学会紀要』四六、二〇〇九年）。

中嶋諒「学習院大学図書館所蔵漢籍から見なおす京都学習院の教育」（『学習院大学史料館紀要』二二、二〇一六年）。

永原慶二編『講座・前近代の天皇二』（青木書店、一九九三年）。

中村一基「鈴門の形成と展開」（鈴木淳ほか編『本居宣長と鈴屋社中—『授業門人姓名録』の総合的研究』錦正社、一九八四年）。

西村慎太郎「近世公家の由緒と伝説」（『国文学 解釈と鑑賞』七〇 - 一〇、二〇〇五年）。

西村慎太郎「寛政期有職研究の動向と裏松固禅」（吉田早苗『近世公家社会における故実研究の政治的社会的意義に関する研究（二〇〇二年度～二〇〇四年度科学研究費補助金研究成果報告書）』二〇〇五年）。

西村慎太郎「松岡行義考」（『東北アジア文化学会 第一〇次国際学術大会発表資料集』、二〇〇五年）。

西村慎太郎「地下官人」（高埜利彦編『朝廷をとりまく人々（身分的周縁と近世社会 八）』吉川弘文館、二〇〇七年）。

西村慎太郎「近世後期地下官人の有職知一内膳司濱島等庭をめぐって」（『論集きんせい』二九、二〇〇七年）。

西村慎太郎『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館、二〇〇八年）。

西村慎太郎「近世後期の即位儀礼をめぐる動向」（『近世の天皇・朝廷研究』三、二〇一〇年）。

西村慎太郎「回禄からの再生—罹災と公家の記録管理」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』七、二〇一一年）。

西村慎太郎「近世天皇をめぐる研究動向と課題」（『人民の歴史学』二〇〇、二〇一四年）。

西村慎太郎「災害による朝廷儀式記録の消失と高御座の再生—天明の大火後の即位礼を事例に」（『国文学研究資料館紀要．アーカイブズ研究篇』一二、二〇一六年）。

野村玄「近世における太政官印再興の歴史的意義」（大石学編『近世公文書論』岩田書院、二〇〇八年）。

野村朋弘『謚一天皇の呼び名』（中央公論新社、二〇一九年）。

羽賀祥二「開国前後における朝幕関係」（『日本史研究』二〇七、一九七九年）。

芳賀登「京坂知識人社中の変質と崩壊—鐸舎・田鶴舎・小柴屋を中心として」（芳賀『近世知識

人社会の研究』教育出版センター、一九八五年)。

芳賀登「江戸の和学者たち」(芳賀『江戸東京文化論』教育出版センター、一九九三年)。

芳賀登「江戸歌文派の歴史的意義」(芳賀『江戸歌文派の成立と展開』教育出版センター、一九九四年)。

芳賀登「平田学研究序説―行動文化人としての学問と学者観を中心として」(『平田篤胤の学問と思想(芳賀登著作選集 五)』雄山閣、二〇〇二年)。

朴薫「一九世紀前半日本における「議論政治」の形成とその意味―東アジア政治史の視点から」(明治維新史学会編『講座明治維新一 世界史のなかの明治維新』(有志舎、二〇一〇年)。

朴薫「幕府政治変革と〈儒教的政治文化〉」(『明治維新史研究』八、二〇一二年)。

朴薫「東アジア政治史における幕末維新政治史と「士大夫の政治文化」の挑戦」(清水光明編『「近世化」論と日本(『アジア遊学』一八五)』勉誠出版、二〇一五年)。

橋本政宜『近世公家社会の研究』(吉川弘文館、二〇〇二年)。

羽仁五郎「天皇制の解明」(『歴史科学大系一七 天皇制の歴史 上』校倉書房、一九八六年、初出は一九四六年)。

林大樹「近世公家社会における避諱と改名」(『近世の天皇・朝廷研究』五、二〇一三年)。

林大樹「近世蔵人頭に関する基礎的考察」(『国史学』二一七、二〇一五年)。

林大樹「近世後期の天皇避諱欠画令」(『日本歴史』八〇五、二〇一五年)。

林大樹「宝暦事件後の朝廷―宝暦一二年の蔵人頭任免を中心に」(『学習院史学』五四、二〇一六年)。

林大樹「近世の近習小番について」(『論集きんせい』四〇、二〇一八年)。

林大樹「近世公家社会における〈御児〉について」(『人文』一六、二〇一八年)。

林基「近代天皇制の成立」(『天皇制の歴史 上』校倉書房、一九八六年、初出は一九四六年)。

林基「近世における天皇の政治的地位」(『天皇制の歴史 上』校倉書房、一九八六年、初出は一九四六年)。

尾藤正英「尊王攘夷思想」(尾藤『日本の国家主義―「国体」思想の形成』岩波書店、二〇一四年、初版は一九七七年)。

平井誠二「武家伝奏の補任について」(『日本歴史』四二二、一九八三年)。

平井誠二「確立期の議奏について」(『中央大学文学部紀要』一二八、一九八八年)。

平井誠二「江戸時代における年頭勅使の関東下向」(『大倉山論集』二三、一九八八年)。

平井誠二「江戸時代の公家の流罪について」(『大倉山論集』二九、一九九一年)。

平井誠二「朝儀の近世的展開」(大倉精神文化研究所編『近世の精神生活』同所、一九九五年)。

平井誠二「武家伝奏と高家」(『近世の天皇・朝廷研究』五、二〇一三年)。

深谷克己『幕藩制と天皇について』を読んで(『人民の歴史学』四二、一九七五年)。

深谷克己「「研究史」における幕藩制と天皇」(『歴史評論』三一四、一九七六年)。

深谷克己「幕藩制国家と天皇」(北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』吉川弘文館、一九七九年)。

深谷克己『近世の国家・社会と天皇』(校倉書房、一九九一年)。

深谷克己「幕藩制と天皇」(『深谷克己近世史論集 三 公儀と権威』校倉書房、二〇〇九年、初

出は一九七五年)。

深谷克己「幕藩制国家論の課題」(『深谷克己近世史論集 三 公儀と権威』校倉書房、二〇〇九年、初出は一九七六年)。

藤岡通夫『新訂 京都御所』(中央公論美術出版、一九八七年、初版は一九五六年)。

藤田覚「近代の胎動」(藤田編『近代の胎動(日本の時代史一七)』吉川弘文館、二〇〇三年)。

藤田覚『近世政治史と天皇』(吉川弘文館、一九九九年)。

藤田覚『近世天皇論』(清文堂出版、二〇一一年)。

藤田覚『泰平のしくみ—江戸の行政と社会』(岩波書店、二〇一二年)。

藤田覚『幕末の天皇』(講談社、二〇一三年、初版は一九九四年)。

藤田覚『江戸時代の天皇』(講談社、二〇一八年、初版は二〇一一年)。

藤田覚『光格天皇—自身を後にし天下万民を先とし』(ミネルヴァ書房、二〇一八年)。

藤田覚「近世の皇位継承」(歴史学研究会編、加藤陽子編集責任『天皇はいかに受け継がれたか—天皇の身体と皇位継承』績文堂出版、二〇一九年)。

古瀬奈津子『撰関政治』(岩波新書、二〇一一年)。本田慧子「後水尾天皇の禁中御学問講」(『書陵部紀要』二九、一九七八年)。

本田慧子「近世の禁裏小番について」(『書陵部紀要』四一、一九八九年)。

本間修平「徳川幕府奥右筆の史的考察」(服藤弘司・小山貞夫編『法と権力の史的考察』創文社、一九七七年)。

前田勉「近世天皇権威の浮上」(前田『兵学と朱子学・蘭学・国学』平凡社、二〇〇六年、初出は二〇〇三年)。

前田勉『江戸の読書会』(平凡社、二〇一八年、初版は二〇一二年)。

間瀬久美子「幕藩制国家における神社争論と朝幕関係—吉田・白川論争を中心に」(『日本史研究』二七七、一九八五年)。

松澤克行「近世の家礼について」(『日本史研究』三八七、一九九四年)。

松澤克行「十七世紀中後期における公家文化とその環境」(『史境』四三、二〇〇一年)。

松澤克行「近衛基熙と音楽—遊芸、政治、肖像画」(熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』二〇〇三年)。

松澤克行「近世の天皇と学芸—「禁中並公家中諸法度」第一条に関連して」(国立歴史民俗博物館編『和歌と貴族の世界』塙書房、二〇〇七年)。

松澤克行「後光明天皇期における禁裏文庫」(田島公編『禁裏・公家文庫研究』三、思文閣出版、二〇〇九年)。

松澤克行「近世の公家社会」(『岩波講座日本歴史一二 近世三』岩波書店、二〇一四年)。

松澤克行「近世の天皇と芸能」(渡辺泰明ほか『天皇と芸能』講談社、二〇一八年、初版は二〇一一年)。

松澤克行「一条兼輝の学問—「兼輝公記」に見える書籍年表稿」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二九、二〇一九年)。

松平太郎『江戸幕府制度の研究』(武家制度研究会、一九一九年)。

松田敬之「近世期の近衛府官人(御隨身)」(『花園史学』二四、二〇〇三年)。

松本丘「隠儒若槻幾斎の研究」(『芸林』六二—二、二〇一三年)。

丸山眞男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年）。

三上参次『尊皇論發達史』（富山房、一九四一年）。

三鬼清一郎「江戸時代の天皇の地位」（安在邦夫ほか編『法廷に立つ歴史学一家永教科書論争と歴史学の現在』大月書店、一九九三年）。

三谷博「日本における「公論」慣習の形成」（三谷編『東アジアの公論形成』東京大学出版会、二〇〇四年）。

三谷博「天皇即位儀礼の再編成一孝明・明治・大正三帝の比較」（三谷『日本史のなかの普遍—比較から考える「明治維新」』東京大学出版会、二〇二〇年）。

三ツ松誠「『御民』宣長—林崎文庫碑文一件再考」（『雅俗』一六、二〇一七年）。

皆川完一「正倉院文書の整理とその写本」（坂本太郎博士古希記念会編『続日本古代史論集 中巻』吉川弘文館、一九七二年）。

宮地正人『天皇制の政治史的研究』（校倉書房、一九八一年）。

宮地正人「明治維新の論じ方」（『駒澤大学史学論集』三〇、二〇〇〇年）。

宮地正人『幕末維新変革史 上』（岩波書店、二〇一二年）。

宗政五十緒「真仁法親王をめぐる藝文家たち」（宗政『日本近世文苑の研究』未来社、一九七七年）。

村和明『近世の朝廷制度と朝幕関係』（東京大学出版会、二〇一三年）。

村和明「近世の武家伝奏の登場」（神田裕理編・日本史史料研究会監修『伝奏と呼ばれた人々』ミネルヴァ書房、二〇一七年）。

桃裕行『上代学制の研究 修訂版』（思文閣出版、一九九四年、初版は一九四七年）。

盛田帝子『近世雅文壇の研究—光格天皇と賀茂季鷹を中心に』（汲古書院、二〇一三年）。

森銑三「屋代弘賢」（『森銑三著作集 七』中央公論社、一九七一年）。

安丸良夫『近代天皇像の形成』（岩波現代文庫、二〇〇七年、初版は一九九二年）。

山口和夫「近世即位儀礼考」（『別冊文芸・天皇制【歴史・王権・大嘗祭】』河出書房新社、一九九〇年）。

山口和夫「近世朝廷の成長と変容」（杉森哲也編『大学の日本史三 近世』山川出版社、二〇一六年）。

山口和夫『近世日本政治史と朝廷』（吉川弘文館、二〇一七年）。

山本寿夫「幕末国学者と神武創業」（『岡山県立短期大学研究紀要』一一、一九六七年）。

山本英貴「家斉期の幕藩関係—毛利家の家格上昇運動を素材として」（『歴史学研究』九八九、二〇一九年）。

横山伊徳『開国前夜の世界』（吉川弘文館、二〇一三年）。

吉岡拓「近世後期における京都町人と天皇」（吉岡拓『十九世紀民衆の歴史意識・由緒と天皇—京都民衆の歴史意識・由緒の旋回』校倉書房、二〇一一年）。

吉川幸次郎「古義堂文庫」（『吉川幸次郎全集 一七』筑摩書房、一九六九年、初出は一九五九年）。

吉川幸次郎「仁斎東涯学案」（『吉川幸次郎全集 二三』筑摩書房、一九八六年、初出は一九七一年）。

李元雨『幕末の公家社会』（吉川弘文館、二〇〇五年）。

利光三津夫「江戸期における律令学」(利光『律令制の研究』慶應義塾大学法学研究会、一九八一年)。

歴史学研究会『歴研アカデミー天皇と天皇制を考える』(青木書店、一九八六年)。

歴史学研究会『いま天皇制を考える』(青木書店、一九八七年)。

歴史学研究会『民衆文化と天皇制』(青木書店、一九八九年)。

渡辺修『神宮伝奏の研究』(山川出版社、二〇一七年)。

渡辺浩「「道」と「雅び」」一～四(『国家学会雑誌』八七一九・一〇、八七一一・一二、八八一三・四、八八一五・六、一九七四～一九七五年)。

渡辺浩『近世日本社会と宋学 増補新装版』(東京大学出版会、二〇一〇年、初版は一九八五年)。

渡辺浩『日本政治思想史一十七～十九世紀』(東京大学出版会、二〇一〇年)。

渡辺浩『東アジアの王権と思想』(東京大学出版会、二〇一六年、初版は一九九七年)。

【史料】(近現代の翻刻など)

興田吉従『諸家々業記』(文化一一年刊、近藤瓶城編『改定史籍集覧 第一七冊』近藤出版部、一九〇三年所収)。

川崎重恭『しりうごと』(『日本随筆大成 第三期一一』吉川弘文館、一九七七所収)。

京都町奉行所「官家風聞書」(嘉永三年、翻刻は荒木裕行「京都町奉行所における朝廷風聞調査について」『近世の撰家・武家伝奏日記の蒐集・統合化による史料学的研究』科研報告書 平成二二 - 二五年度、二〇一四年所収)。

宮内省先帝御事蹟取調掛『孝明天皇紀』(一九〇六年刊本、国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧)。

小林元儁(深川潜蔵)『金剛談』(『日本随筆大成 第三期一一』吉川弘文館、一九七七年所収)。

佐々木弘綱撰『足代弘訓翁家集』(博文館、一八九一年)。

下橋敬長述、羽倉敬尚注『幕末の宮廷』(平凡社、一九七九年)。

勢多章甫「思ひの儘の記」(『日本随筆大成 第一期一三』吉川弘文館、一九七五年所収)。

徳川家蔵版『水戸藩史料 別記上』(吉川弘文館、一九一五年)。

中井竹山『草茅危言』(滝本誠一編『日本経済叢書 一六』日本経済叢書刊行会、一九一五年所収)。

成島司直ほか編『続徳川実紀 第二篇』(経済雑誌社、一九〇五年)。

伴五十嗣郎編『足代弘訓未公刊史料集』(皇學館大學神道研究所、一九九三年)。

深井雅海・藤實久美子編『近世公家名鑑編年集成』一～二六(柊風舎、二〇〇九～二〇一四年)。

藤井讓治・吉岡眞之監修・解説『天皇皇族実録』(ゆまに書房、二〇〇五～二〇一四年、宮内庁書陵部所蔵本の複製合本)。

真木和泉「経緯愚説」(安政六年、奈良本辰也校注『日本思想大系三八 近世政道論』岩波書店、一九七六年所収)。

松岡辰方問・竹屋光棣答「松竹問答」(『日本随筆大成 第三期一〇』吉川弘文館、一九七七年所収)。

松岡行義「後松日記」(『日本随筆大成 第三期七』吉川弘文館、一九七七年)。

松崎慊堂著、山田琢訳注『慊堂日暦二』(平凡社、一九七二年)。

松浦静山著、中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話』一～六（平凡社、一九七七～一九七八年）。
松浦静山著、中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話続篇』一～八（平凡社、一九七九～一九八一年）。
三上景文著、正宗敦夫編・校訂『地下家伝』（国文学研究資料館地下家伝・芳賀人名辞典データベースにて閲覧）。

弄翰子編輯『平安人物誌』（堺屋仁兵衛ほか版、国際日本文化研究センター「平安人物志データベース」<https://lapis.nichibun.ac.jp/heian/index.html>、および「平安人物志短冊帖データベース」<https://lapis.nichibun.ac.jp/tanzaku/index.html>にて閲覧）。

和学講談所「和学講談所御用留」（斎藤政雄『『和学講談所御用留』の研究』国書刊行会、一九九八年所収）。

【史料】（原史料）

宮内庁書陵部所蔵（宮内公文書館）「鷹司關白幕府へ廷臣賜祿交渉ノ件・東幸儀衛圖讃詞・松平春嶽侯安政戊辰年登營記事」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、勘解由小路資善「資善卿記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、五条為定「菅葉」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通「聖恩感記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通「鷹司政通記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通「鷹司政通記草」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通編「位田職田等之事」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通編「朱墨井蛙」（函架番号：二六五 - 六四六）。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通編「朱墨井蛙」（函架番号：二六五 - 七三〇、史料現物の表題は「品田位田職田季祿口分田之事 完」）。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通編「朱墨井蛙抄」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通編「賦税雑勘」（史料現物の表題は「勘物」）。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、鷹司政通編「万機井蛙」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、竹尾次春（竹尾善筑）問、松岡辰方・行義答「竹間松答」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、竹屋光棣編「光格上皇修学院御幸雑例」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、橋本実久「橋本実久日記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、橋本実麗「橋本実麗日記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、葉室顕孝「上皇初度修学院御山荘御幸申沙汰記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、東坊城聡長「東坊城聡長日記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、松岡辰方編「拾砂集」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）、山科言成「山科言成卿記」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）「御門弟名籍」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）「文政十三年堂上以下加増之件ニ付武辺返答留」。

宮内庁書陵部所蔵（図書寮文庫）「役俸之儀ニ付関東使者演舌書並再達書」。

国立公文書館所蔵、甘露寺国長「国長卿記」。

国立公文書館所蔵、鷹司政通編「万機井蛙」（甘露寺国長写）。

国立公文書館所蔵、成島司直「文政十年相国宣下武門記」。

国立公文書館所蔵、日野資愛「公武御用日記」。

国立公文書館所蔵、広橋胤定「公武御用日記」。

国立公文書館所蔵、万里小路正房「正房卿記」。

国立公文書館所蔵「墨海山筆」卷五八、屋代弘賢問・松岡辰方答「屋代松岡問答」。

国立公文書館所蔵「松栄色」（表紙上の表題は「相国宣下記 全」）。

国立国会図書館所蔵、竹尾次春（竹尾善筑）「松栄色」。

国立国会図書館所蔵「屋松手簡同注解及松竹余論付」。

国立国会図書館所蔵「視聴草」初集第六、屋代弘賢問・松岡辰方答「屋松問答」。

国立歴史民俗博物館所蔵（平田篤胤関係資料）「屋松手簡同評注」。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、伊藤東峯「故准后文恭公墓誌銘 附同拓本」。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、伊藤東峯「鷹司関白政通公御用記」（伊藤東岸追記。
実物の表題は「鷹司関白政通公御内用記」）。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、伊藤東峯「東峯先生家乗」。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、伊藤東峯「本朝聖教伝記」（三二 - 四五 - 一「靖共先生雑記」第一冊所収）。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、勘解由小路資善撰「靖共先生碣銘」。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、中井竹山『草茅危言』（拙修斎叢書版）第一卷。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、「感閱神明於二典叙」。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、「初見帳」（六一 - 四八）。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、「初見帳」（六一 - 五三）。

天理大学附属天理図書館所蔵（古義堂文庫）、「東峯来簡集」第二袋。

東京大学史料編纂所蔵、三条実万「三条実万公記」。

東京大学史料編纂所蔵、鷹司政通編「朱墨井蛙案」。

東京大学史料編纂所蔵、徳大寺実堅「公武御用日記」。

東京大学史料編纂所蔵、野宮定功「定功卿記」。

東京大学史料編纂所蔵、柳原隆光「隆光卿記」。

東京大学史料編纂所蔵「勘解由小路家譜」（勘解由小路資生提出、一八七五年）。

東京大学史料編纂所蔵「舟橋家譜」（舟橋康賢差出、一八七五年）。

東京大学史料編纂所蔵『地下次第』（陽明文庫本の写真帳）。

山口県文書館所蔵「度会弘訓神主え硯付与状」。

論文の内容の要旨

論文題目 近世後期朝廷の復興理念と朝幕関係

氏名 金 炯辰

本論文は、近世後期朝廷の変容を、朝廷の復興理念の特質と、当時の朝幕関係の展開という二つの問題を軸に検討したものである。

近世後期朝廷・朝幕関係の研究では、幕末維新史を見据えた上で、既に 18 世紀後半から朝廷で「復古派勢力」が台頭したこと、そして当時の光格天皇が強烈な君主意識をもって朝廷の復古を推し進めたことが注目されてきた。しかし、従来の研究では、1) 光格天皇の個性が過度に強調され、朝廷で他の諸主体が果たした役割の検討は遅れていた。2) 当該期の朝廷における復古とは、どの時代の、どのような歴史的遺産の復古をめざしたものが明瞭に説明されていない。3) かかる朝廷の変容に幕府・武家社会が示した姿勢の検討も十分ではなかった。

こうした研究史上の課題を踏まえ、本論文は、天皇・関白・公家など朝廷の諸主体の思考・意志と役割に注目して朝廷運営の変容過程を把握し、かつ、朝廷問題に関わる幕府・武家社会側の人々が持った朝廷観についても多角的な理解を図った。更に、光格天皇に関わる研究と幕末以降の研究を「接続」させる必要があるという状況に鑑み、光格天皇の譲位以降、つまり文政年間(1818～1830)からペリー来航(嘉永 6・1853)以前までを研究の対象時期とした。なお、当時の朝廷がめざしたものは、中国の文献を参照した(天皇家で前例のない)天皇の諱の欠画令にみられるように、古の再興・復古に限られるものではない。この点を踏まえ、本論文では、朝廷とその構成員の持つ、朝廷権威の強化・荘厳化への志向を、全体として復興理念と呼ぶことにした。

本論文の第一部、第一章～第三章においては、19 世紀前半の朝廷における復興理念の特質を、光格天皇(上皇)以外の諸主体の思考と動向に留意して分析した。

第一章では、仁孝天皇の禁裏御所で行われた和漢書物の学習である御会読・御講釈を素材に、そのテキストに採択された書物の性格など学習内容の特徴、参加者の構成、御会読・御講釈にみられる仁孝天皇の意志などから、御会読・御講釈が当時の朝廷運営に持つ意義を考察した。

仁孝天皇には学習への熱意があり、漢籍の読解力など、その熱意を支える学識があったことが明らかにされた。仁孝天皇本人の主体性に加え、東坊城聡長・勘解由小路資善・三条実万など、仁孝天皇のもとで学問の資質を持つ公家に活躍の機会が与えられ、朝廷運営の主力へと成長できたことも重要である。なお、国書を読む和御会において、神代巻を除いた『日本書紀』と六国史、『令義解』『延喜式』『儀式』(貞観儀式)といった、律令制下の官撰の史書・法令などが重点的に読まれたことは、第二章以下で分析していく志向性とも繋がる特徴と評価できる。

第二章では、将軍徳川家斉の太政大臣昇進(文政 10・1827 年)を許可した朝廷が、その見返りとして朝廷構成員に対する支援拡充を幕府に求めるなかで、その支援の方法として、主に関白鷹司政通により具体化された律令封禄の再興構想の内容と、それに関連する政通の言説を検討した。

従来、政通の行跡は幕末期を中心に知られており、関白在職期の政通が朝廷の意思決定に発揮した影響力と、それが朝廷運営・朝幕関係に持つ意味を正面から考察する試みは極めて少なかった。

た。本章では、この案件との関係で政通が残した資料調査・考証書と備忘などを利用することで、関白在職期における政通の歴史観や武家政権に対する認識に関連して、日記・書簡など他の史料には現れない思考の様相を精密に分析できた。朝廷運営の模範とされてきた摂関期以降の「聖代」より遡り、大化の改新を始めとする、律令制の形成・確立期の歴史的遺産がその視野に入ってきたことは注目に値する現象である。

第三章では、天保 11 年（1840）光格上皇崩御後の天皇号・漢風諡号再興を、漢風諡号の選定過程に焦点をあてて検討し、そこから垣間見られる朝廷運営過程の特徴、そして朝廷の理念的変容における朝廷外部との関係を考察した。政通が、所司代との内々の交渉でこの再興を実現させた主役であること、また政通は、再興自体の実現に止まらず、諡号の選定についても彼自身の好みを貫徹させることに意欲を持って取り掛かったことが分かった。光格天皇・仁孝天皇号はともに、仁斎学を受け継ぐ古義堂の伊藤東峯・東岸が政通に提出した案が、おそらく政通の意向により東坊城聡長など菅原氏の案として勅問に出され、採択されたものである。なお、この再興の推進にあたり、政通に具申された東峯の意見は、中井竹山「草茅危言」に大いに共鳴する内容であった。また古義堂伊藤家は、諡号宣下詔書案の相談など様々な場面で、政通のブレインのような役割を果たしている。こうした本件の処理過程は、天皇権威の荘厳化のため、儒学の理念や中国の君主像が参照された側面を如実に表す事例でもある。

本件の処理過程で政通が演出しようとした朝廷像は、勅問で廷臣一般の意見を聞いて意思決定がなされ、かつ、菅原氏など学問の家の役割が重視される形のものであった。しかし、実際の意思決定は、政通にほとんど掌握されたようなものであった。こうした政通のやり方を他の朝廷構成員たちがどのように受け止めていたかは、幕末史に繋がる論題でもある。

本論文の第二部、第四章～第六章は朝幕関係の問題を軸に構成し、朝幕間の交渉過程の実態、朝幕関係の変容をめぐる当時の朝廷・幕府関係者の認識、そして武家社会の朝廷観を考察した。第二部は全体として、将軍徳川家斉の太政大臣昇進に関連する事柄を分析対象とした。朝幕関係の融和が大々的に演出されるなか、朝幕の関係者らがその情勢をどのように受け止め、相手との交渉にどのような姿勢で臨み、そして相手に対する認識がどのように変化していたかを考えた。

第四章では、太政大臣昇進に対する幕府御礼使の朝廷派遣を素材として、朝廷から御礼使の派遣が求められた経緯、御礼使の選定と待遇をめぐる朝幕間の駆け引きの実態、そして老中首座青山忠裕の御礼使派遣に際して現われた朝幕の関係者たちの現状認識を検討した。本章では、幕府の表坊主竹尾次春（竹尾善筑）がこの昇進に関連する情報を収めた編纂物「松栄色」などを通じて、この御礼使派遣を機に、大臣補任者の在京問題、諸大名と天皇・朝廷の由緒、徳川一門大名と朝廷の結びつきの可能性など、朝幕・公武関係の構造的問題をめぐってあぶり出された関係者らの認識を明らかにすることができた。

第五章では、朝廷構成員への支援拡充をめぐる朝幕の交渉過程を検討した。第二章でみたとおり、朝廷は律令封禄の再興の形による支援策を構想してその財源を幕府に求めたが、本章では、関白鷹司政通が所司代に示した要望書や、武家伝奏と禁裏付の談話などを材料に、朝廷が本構想に込められた復古の趣旨を幕府にどのように説明し、幕府関係者らは朝廷のその論理をどのように受け止めていたかに焦点をあてた。幕府は復古をめざす朝廷の動きを決して歓迎したわけでは

なかったようだが、それを積極的に阻止することもなかった。朝廷復古の理念としての正当性は、近世後期の朝幕関係において、建前の論理を規定するアприオリな認識になっていたようにもみえる。

第六章は、家斉の太政大臣昇進儀礼の装束調進をめぐって起こった幕臣屋代弘賢と有職故実家松岡辰方の論争を手がかりとした。特に、辰方の息子松岡行義が、この論争を契機に有職故実のあり方を新しく模索するなかで、天皇・朝廷の歴史と現在をどのように論じたかに注目した。彼らは、理想的な「上古」の歴史を規準として「中古」以来の朝廷を批判する視点を持っていた。もっとも、朝廷内部で現れた復興理念のなかにも「中古」より遡る時代が視野に入ってくる傾向があることを先にみたが（第二章）、本章で検討した行義らの言説において、かかる論理は、当時の現実の朝廷と公家社会のあり方に対する肯定よりは、否定・批判の根拠になっている。こうした検討を通じて、朝廷の歴史と現在に対する朝廷外部からの関心は、必ずしも現実の朝廷権威への傾斜に収斂する現象ではなかった点を指摘した。

終章では、まず本論で究明したことをまとめた。本論文では 19 世紀前半の朝廷運営と朝幕関係について、1) 仁孝天皇・菅原氏など朝廷の諸主体の役割、2) 関白鷹司政通の思考と行動、3) 朝廷の復興理念でみられる、律令制形成～確立期の歴史と中国・儒学の君主像への関心という特質、4) 朝幕関係の変容をめぐる当時の朝廷・幕府関係者らの認識、5) 朝廷の理念の変容と朝廷外部との関わりについて、様々な史料と事例を発掘しつつ理解を深めることができた。

更に、今後の研究に向け、1) 当時の各撰家、特に鷹司家の家政のあり方、2) 諸思想の動向と統治権力との関係を踏まえたうえでの朝廷復興理念の位置づけ、3) 朝廷に関連する情報の流通、および朝廷に対する幕府役人の行動様式という視角から、天皇・朝廷と朝幕関係が持つ意味について何がいえるかをめぐって、いくつかの課題と現段階の展望を示した。

本論文では、武家伝奏御用日記など従来の研究で多く用いられた史料群に加え、関白鷹司政通の考証・備忘録、幕府儀礼開催の関連情報を収めた幕府役人の編纂物、そして古義堂伊藤家の史料など、これまで朝廷・朝幕関係の研究で関心が薄かった史料群の価値に着目した。これらを新しい角度から再検討したことで、研究史に寄与できる様々な事実関係と論点が発掘できたことが、研究の全体にかけての特徴的な成果といえる。